信州大学教育学部 同窓会報

信州大学教育学部同窓会報
【第 6 号】
発行人　新　井　好　仁
事務局　長野市西長野6ノロ
信州大学教育学部
教育実践研究指導
センター内
TEL　(0262)32-8106(代表)

同窓会の活動と組織充実に向けて

同窓会長　新　井　好　仁

一、はじめに

信州大学教育学部並びに前身の師範学校の卒業生は、それぞれが同窓会や同期会など、機会をとらえて行って来ていました。そこでは、現状や将来あるべき教育論議を交しながらも、そのことが教育の実質的な向上に具体的な形で反映するには弱いものであると言う慨嘆があったことは否めない事実です。そうした中で「同窓会」を組織しようと願う先輩同志の動きがあって、昭和六十二年八月十一日（この日を記念として毎年総会を開催）信州大学同窓会会則が制定されたわけです。

二、同窓会の果たしてきたこと

特筆すべきこととして、平成三年度より念願の大学院教育学研究科が学校教育・国語教育・数学教育・理科教育・音楽教育・保健体育・技術教育の各専修が設置されたことです。この詳細は「同窓会報」第五号に掲載されております。この中で鈴村学部長先生は「子どもが感動し憧れるような深い専門的な知識と技術をもち、…子どもの内面世界に適切に応答できる教師の養成を主目的…」と言われています。第一期生が本年二年目を迎え、また、新たに美術教育専修が設置されました。今後は社会・英語・家政教育専修の設置が進められています。同窓会としても、教師として生涯を貫く使命観ある人材育成のために、大学院設置等学部充実補助や研究助成金を、会員の皆様より寄せられた会費より支出させていただいています。

二つめに、卒業生名簿刊行会（松橋英幸刊行会長）を組織し、昨年度その刊行が収束することができました。刊行会の皆さん並びに献身的に協力された信教印刷様に深く敬意を捧げます。

三、組織充実に向けて

本会の目的に「会員の親睦」と「母校の発展」に関する事項が掲げられています。親睦とは信州教育の質的向上を図る論議の場であり、そのことを通して、教育学部の充実発展に寄与しようとするものです。今後の事業としては、大学院後発三専修の新設援助と同窓会館建設があります。後者については、建設問題研究委員会を結成し、青写真をどう描くか検討を加えていく考えです。

それにつけても、資金の不足は深刻であり、多くの卒業生が正会員となる終身会員（一万円）の納入状況は遅々としています。そこで、建前と本音が一致するよう組織の充実を本年特に力を入れるために、県小・中・高の各校長会にご協力をお願いし、郡市別の同窓会支援組織化を図り、正会員への勧誘活動を展開したいと考えております。

退職された卒業生の多くの方々が正会員になっております。どうか現職で未加入の皆さん、率先して正会員になられるよう期待しております。

信州大学大学院 教育学研究科の紹介

教育学研究科について

研究科長　鈴村金彌

信州大学大学院教育学研究科（修士課程）も設置以来第二年目を迎え、本年度からは美術教育専修も追加設置されて一段と充実して参りました。そこで、今回は「大学院に入学して勉強するということはどういうことか」ということを少し申しあげ、同窓会のみなさま方やお子さま方の本学大学院ご入学のご参考に供したいと思います。

「大学院生として勉強する」ということの中核は、二点あると思います。そのひとつは、単に大学学部より高度で精緻な知識・技術・教養等を修得することではありません。それは、自分の生活の中に「そのような学習の習慣を確立すること」であります。端的に言えば、勉強は習慣です。それゆえ、卒業後も高度な勉強を継続できる生活習慣、精神的構え、それに必要な知識・技術・研究

法等をしっかり身に付けることが中核です。それゆえ、これらが既にある人は、大学院へ来る必要はありません。逆に、在学中だけは勉強したが卒業後は勉強しないという人は、大学院卒業の意味が乏しいといえます。

ふたつめは、知識・技術等の学習過程で教師と対等に格闘できることです。換言すれば、質問し、調査し、実験し、実践するプロセスやその成果の中で時に教師の心胆を寒からしめ、時に論争で教師を論破するなどが、「院生として勉強している証拠」なのです。しかも、このことこそ大学院担当教師を喜ばせ、励まし、信州大学大学院教育学研究科（修士課程）の発展の真の原動力となるものです。教師に片手間で教えられて満足して卒業していく院生ばかりでは、院生はもちろん大学院そのものの将来も先が知れています。

大学院の発展を願うあまり、幾分挑戦的言辞を弄しましたが、私どもも大学院の発展のために全力を傾けますので、同窓会のみなさま方におかれましても今後ともこれに対する絶大なご支援、ご協力をお願い申しあげます。

学校教育専攻

教育学分野

武藤孝典

学校教育専修の教育学分野では、まず修士課程の一年次生全員を対象にし、「現代教育学」（二単位）を開講している。これは院生すべてに、現代教育の特徴を教育哲学的に、また教育制度論的に考究させるものである。つづいて、「学校教育総論」（二単位）を開講し、ここでは、学校教育専修の院生を対象に、教育学分野・教育心理学分野・幼児教育分野・障害児教育分野のそれぞれが当面する基本的課題について考察させる。

教育学分野においては、教育哲学、日本教育史、西洋教育史、教育課程論、教育方法論、教育制度経営論、教育社会学の各分野ごとに、専門的な特講（二単位）と演習（二単位）を開講し、それぞれの分野での先端的な課題を把握させる。

二年次においては、一年次の演習を土台にして、「学校教育特別研究」（二単位）を課し、修士論文に取り組むことになる。

教育心理学分野

筒井健雄

学校教育専修における教育心理学分野は、教育に関わる問題の心理学的研究と教育を行う分野です。細かく分けると教授・学習心理学的研究と教育、発達心理学的研究と教育、臨床心理学的研究と教育などがあります。

さらに具体的に言うと、教授・学習心理学的な面では守助教授が「学校教育における教授・学習過程を認知心理学的に研究し、その方法論や研究成果を学校現場にどのように適用できるか」とか「思考や言語に関する心理学的研究の歴史・方法・成果について」などを研究し教育しております。発達心理学的な面では野口教授と川島助教授が担当しており、野口教授は身体の動きから心に展開する動作学の理論によって研究を進め、実践的には動作訓練、動作法、動作療法を研究し、教育しておりますし、川島助教授は発達心理学の中でも社会心理学的な面の対人関係、特に道徳的な価値観に関わる愛他行動の研究と教育をしております。臨床心理学的な面では筒井教授と田上助教授とが担当しており、筒井教授は教育・臨床心理学を単なる経験の寄せ集めではなく、基本原理から説明できるものにしようとしており、実践的にはカウンセリングやフォーカシングを研究し教育しておりまし、田上助教授は人間の社会化と個性化を目指す行動変容のためには社会的環境の影響が重要であるとする社会的学習理論を研究し、やる気を育てる教育を実践しております。

障害児教育分野

田巻義孝

障害児教育分野での教育研究は、三名の教官が担当しています。次に寸評を交えながら、それぞれの教官を紹介します。

鈴村金彌（障害児教育学）　学部長の激職をものともせず精力的に難問を解決し、その挨拶・講話にますます磨きがかってきた。専門は、自閉症児等の治療教育です。

小島哲也（障害児心理学）　言葉をもたない子どものコミュニケーション手段について、精力的に研究しているわが学部のホープ。学生からもよく信頼されている理博です。

田巻義孝（障害児病理学）　妊娠中の動物に薬物などを与え、その出生仔の行動や学習能力を観察している。わが国の行動奇形学分野の開拓者で、文博と医博の二つの学位をもつ。

大学院との関係で特筆すべきことは、養護学校教員専修免許状が取得できるように、二十四単位の授業を開講していることです。この単位数には、大学院学生の教師としての実践指導力を向上させるため、二年次後期に行う附属養護学校での臨地実習（二単位）も含まれています。

このように大学院設置の趣旨が実現できるように、附属養護学校こ協力等を得ながら三名の教官が力を合わせつつ努力していますので、今後ともご支援の程をお願い申しあげます。

幼児教育学分野

山田　敏

幼児教育学分野の担当教官の授業内容と研究テ

ーマ等の概略は次の通りである。

幼児教育学担当の山田教官の授業は、幼児教育学特論、幼児教育学演習、幼児教育学特別研究、学校教育総論。主たる研究テーマは「幼児教育方法の研究」であり、特に「遊びを基盤とした幼児教育方法の研究」と「世界各国の幼児教育方法の革新に関する研究」とに力を入れている。

布谷教官担当の保育内容分野では、乳児期から児童前期までの子どもの生活、遊び、学習等を様々な視点から取り上げ、理論・実践面から追究する。特に、幼児・児童の人間形成の視点から、環境とのかかわりや体験の意味とその質、自立の意味とその具体的な中身、等について研究を行なう。

天岩教官担当の幼児心理学の分野では、子どもが学習をする際、与えられた課題や情報をどのようにとらえ、過去の経験や知識といかに結びつけ、そこで何を推論し判断するかという一連の過程のメカニズムを明らかにすることを目指して、研究と教育を行っている。

教科教育専攻

国語教育専修

堀井謙一

国語教育専修は国語教育、国語学、国文学、漢文学、書道の五分野からなる。

国語教育は、国語教育の目的、内容、指導法、教材・教具、評価法等を中心に、国語科教育を体系的・総合的に教授・研究し、さらに児童、生徒の能力と授業との関係をも教授・研究している。

国語学は、児童・生徒の言語能力の急激な変貌を史的観点から分析、検討し、言語政策、語法理論等から、教育現場の諸現象を究明することにより、国語学を中心とした言語教育および言語教材のあるべき姿を体系的総合的に教授・研究する。

国文学は、作品分析および文学史的観点からの作品の的確な理解、とくに作品の面白さの理解に基づく児童・生徒の内容的学習意欲を喚起する教授法を確立し、国文学的分野を体系的・総合的に教授・研究している。

漢文学は、中国文化全般を包括した中国学の観点から、中国の文学・経学・思想、特に原始儒学および朱子学の形成過程と日本におけるそれらの受容過程を中心に、漢文学を体系的・総合的に教授・研究する。

書道は楷書指導、中国六朝時代の主要作家の書法、史的価値、用筆法、結構法、書の表現法、鑑賞および書道科指導法を体系的・総合的に教授・研究している。

数学教育専修

岩永恭雄

小・中・高等学校における算数・数学の授業において、その指導にはきちんとした数学的な背景や裏付けを理解していないと誤った指導をすることになるので、代数学、幾何学、解析学の基礎的理論に関する教育・研究を基盤として、初等・中等教育を中心とする数学科教育の理論的研究と実践的研究とを緊密に結合するように配慮した教育を行なう。

このような教育方針に基づいて次の数学教育に関する講義を開設している。「数学教育総論」においては、数学理論の研究成果と教科教育実践との関連から数学科教育の目標・歴史・内容・方法等教科教育の総体的な在り方について概説する。「数学科教育特論」においては、数学教育目標に沿った評価の進め方について検討する中で学習者の活動に対する予想の仕方、教育活動の調整の方法を含めた教育評価の在り方を究明する。「数学科教育演習」では、数学的能力とは何かを各種文献の購読を通して追究すると共に数学の学力に関する考え方についても考察する。「数学科授業研究」では、数学科の教育目標の分析、教材選定、指導場面の構成、学習活動に対する考察等から数学科授業研究の方法を検討する。

これらの講義を通して得た知識を基にセミナーで大学院生と教官との議論を行ない、その集大成として数学教育の修士論文を完成する。

理科教育専修

漆戸邦夫

基礎学としての物理学・化学・生物学・地学等に関する教育と研究を基盤として、初等・中等教育を中心に理科教育に関する教育課程、学習指導、教材研究、授業研究等の諸問題について専門的資質と能力を深めるための、理論的・実践的な研究・教授を行っている。本専修は、五分野の学問領域から構成されており、その研究・教育内容は次のとおりである。修士論文は一専攻分野でまとめるが、理学研究科の大学院ではないので履修する授業の方は一分野に偏ることなく広く五分野全体を学習するよう指導している。理科教育学分野では、理科教育の目的、内容、指導方法、教材、教具、評価法および児童、生徒の能力と授業との関係等を中心に、あるべき理科教育学を体系的・総合的に教授・研究している。物理学分野では、液晶の相転移と溶液中の高分子間相互作用、半導体中の不純物と格子欠陥の挙動、液体ヘリウムの挙動等を理論、実験を中心に物理学分野を体系的・総合的に教授・研究している。化学分野では、有機化学及び高分子化学並びに核心学及び放射化学の二学問領域を中心に、化学分野を体系的・総合的に教授・研究している。生物学分野では、植物生理学、動物生理学、植物生態学、植物分類学の四学問領域を中心に生物学分野を体系的

・総合的に教授・研究している。地学分野では、火山地質学、気象学、層位学の三学問領域を中心に地学分野を体系的・総合的に教授・研究している。

音楽教育専修

村杉　弘

音楽教育専修では、定員三名のところ、初年度は六名の学生を迎えて発足しました。その内訳は、学部から引き続き入った女子学生三名、後は男子学生で、一名は東京芸大の卒業生、他二名は本学部卒業生の現職教員からなっています。

新しく発足したばかりなので、何かと不慣れなことが多いわけですが、幸い東京学芸大の高萩保治（音楽教育学）、東川清一（音楽学）の両先生に非常勤をお願いしてなんとかこの一年を過ごしてきました。

二年目を迎えた今年は、新たに三名の女子学生が加わりました。何れも本学部卒業生で一名は現職教員、他は学部から引き続き入った学生です。

この頃は、一回生の修論のテーマ提出締切日が迫ってきています。最終決定ではありませんが、才能教育に関する研究、伝統音楽指導の中の口譜に関する研究、日本の声楽教育史の研究、学校音楽教育の指導法の研究等からなっているようです。

大学院は、いうまでもなく学問研究の場です。音楽を芸術としてだけ捉えるのではなく、学問として捉えることの認識を新たにして、教官学生ともども修論作成に向けて努力しています。

保健体育専修

藤沢謙一郎

保健体育専修は、保健体育科教育、体育学、運動学、学校保健の四分野で構成されている。

体育分野では、学校教育における体育の史的変遷、身体運動の制御と学習過程、体育経営管理の構造や過程を、運動学分野では、人間学的立場からの現象学的運動理論、発達バイオメカニクスとトレーニング理論を、また学校保健分野では、児童生徒の発育・体力と栄養問題、健康管理問題、生涯教育の視点からの健康教育のあり方等を中心に教育研究をしている。

保健体育科教育分野は、これら体育諸科学の研究成果を基盤に、保健体育科教育にかかわる原理的問題、よりよい授業成立の前提となる運動素材の教材化や授業分析法等を、教育研究し、理論と実践の統合を図るよう努めている。

技術教育専修

石橋誠一

授業科目は（一）技術教育総論、（二）技術科教育特論、技術科教育演習、技術科教材論、技術科授業研究、（三）電気技術特論、電気技術演習、電気技術実験、（四）機械技術特論、機械技術演習、（五）金属工学特論、金属工学演習、（六）技術教育特別研究に大別される。

（一）では技術科教育の目標および領域・内容の構成、各領域に共通して留意すべき事項などを扱う。

（二）では技術教育の史的考察を行なった後、今日的な課題に関して教材のあり方、学習指導方法を論じ、さらに授業研究として具体的に授業の記録・分析・評価などを行なう。

（三）の電気では、オシロスコープなどの電子計測手段を用いた実験と講義とを並行して行ない、電気・電子領域の理解を深める。

（四）の機械では、特に熱力学および流体力学に立脚する機械、たとえば内燃機関、の授業を通じて機械領域の理解を深める。

（五）の金属工学では、金属材料を利用する立場から金属の種々の環境での化学的・機械的安定性について述べる。

（六）の技術教育特別研究は修士論文作成に関する指導であり、技術科教育は北沢教授、電気は石橋教授、機械は嵩教授、金属工学は浅輪教授が担当する。

美術教育専修

上田秀洋

平成四年四月より、先発の専修に引き続き「美術教育専修」が設置されました。同窓会の皆様のご支援、多くの関係者のご労苦に御礼申し上げます。

美術教育専修は、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史に関する教育・研究を基盤とし、初等教育・中等教育を中心に美術科教育に関する教育課程、学習指導、教材研究、授業研究等について、専門的資質と能力を深めるため、理論的・実践的な研究・教育を行うのを目的としております。教育研究水準の向上を図り、現職教員の再教育を含めて高いレベルでの教員養成教育を行い、社会的使命を達成するため設置されました。

同窓会には現職教員の方も多くおられ、先生方には、日々の教育・研究の実践に多忙なことと拝察いたします。その豊富な経験の中でこそ得られる貴重な「教育・美術」に関する問題点、時間を必要とする様々な研究課題を、大学院の方へ持ち込んでいただき、共に研究させていただきたいと思います。当専修の存在価値を高めて行くのは、その構成員は当然のこと、教師教育に接せられた同窓会の皆様のご意見でもあります。

明日への「美しき魂」を養うこと、理性と感性を止揚した全人間性の教育の一片になればと考えております。引き続き皆様方のご支援をお願いしつつ、ご報告、ご案内申し上げます。

大学院生（現職教員）の声

◇ 二年次生 ◇

鈴木　明（学校教育専修）

「すると、あまり専門書は読んでいないわけですね」「教育は科学ですよ。そんなことが研究の対象になりますか」――冷たい汗をかきながらの試験を受けた日から一年が過ぎた。

現場から離れての一年は、不勉強きわまりない自分の考えをグラグラと揺すぶるものであった。「経験」や「勘」で行っていたことに少しでも科学性をもたそうと思ってきたが、やればやるほど、ならねばならぬことがでてきてこわくなる。

このようにして、学生どうしの先達のないまま第一歩をしるしたわけであるが、二年目の今は、学校で教えながらの研究となった。生徒といるのは、やはり楽しい。この二つの状況を、なんとか有効に結びつけられないだろうか。実際に生きる研究、現場から頼りにされる大学院として成長していってほしいし、そうさせていきたいものだと思っている。

栗林正幸（国語教育専修）

現場に戻っての研修も早一か月が過ぎようとしている。現在慌しい中に日々を過ごしているが、昨年一年間を振り返ってみると、いろいろと角度を変え、広い視野から現在の教育を考えられた。これは、現場の渦中にあっては容易ならざることで、大変貴重な体験をさせていただいたものと、感謝している。その反面、私自身の努力不足のため後悔の思いがいくつか残してしまった。

一つには、講義・演習・レポート等を通じ、教育学や心理学等を学んだが、現場に戻ってそれをいかに生かすかという視点が私自身に十分でなかったということである。

もう一つは、自身の研究課題について思うような進展が得られなかったということである。改めて我身の学問に対する甘さを痛感する次第である。

四月は現場のペースに体をなじませることで精一杯であったが、これからは時間を生み出し、修士論文の完成に力を尽くしたいと思う。

本山育人（国語教育専修）

人生の半ば、教員生活も折り返し点に近づいた昨年度、現場を離れて研修の機会を与えていただけたことにまず感謝します。

日頃現場にいますと、目の前の子ども達の指導に明け暮れて、どうしても広い視野での教育の現状や教科の専門性について、自らのあり方を問う時間が奪われがちでした。

そんな中で、十七年ぶりに学生生活にもどり、講義のあいだに、図書館や書店めぐりなどができたり、朝の通勤時間に拘束されないため朝刊をじっくりと読めたり、あるいは全国的な学会に参加できたり等で、身も心もリフレッシュできた一年間でありました。

院も発足したてで、運営的には現職派遣学生にとって二年目の問題点が山積していますが、今後多くの皆さんに門戸が開けるよう望んでいます。

北村　雅（数学教育専修）

「机とイスは用意しました。あと研究に必要な資料等は、自分の足で日本中かけずりまわってさがして下さい。」という鈴村研究科長の厳しいはげましを受けて大学院に入学してから、早一年が経過しました。〝大学院〟という実態さえも十分に理解できないでいた自分にとって、大学院での研究そのものや方法、内容等は全く未知のものであり、何をどうするのかということさえも分からない状態でした。唯、九年間の教員生活の経験だけがたよりです。しかし実際に研究を始めてみるとその現場での研究が、自分の勉強不足のために不十分であり、穴だらけの研究をしていたことを身を持って感じました。今は、現場にもどり、現場と研究の二本立てです。目の前の生徒を教えながら、結果の出せる教育研究、生徒に生きる教育研究をしようと心にちかっておる毎日です。

西澤道生（数学教育専修）

信州大学教育学部大学院の一期生として、すでに一年が過ぎてしまった。この一年間、研究とは何かを知ることが、私の大きな課題であったように思う。これを知るために一年が過ぎてしまったような観さえするのである。いったい何を学び、何を身につけたのか、情けない思いは今も同じであるが、こうして現場にもどり、生徒を見たときに、以前とは異なる観点で生徒を見れるようになっていることに、この一年間の価値を見い出している。なぜわからないのか、なぜできないのか、何を身につけさせるのか、その本質的なものを研究課題としてとらえる力が、多少なりとも向上したような気がするのである。

二年次生として、現場とのかけもちで修論を仕上げるという大きな課題が残っているが、生徒が目の前にいることがプラスになりえるような、そしてまず自分自身納得のいく研究として仕上げていきたい。

小林徹哉（音楽教育専修）

数年の現場での実践を重ねているうち、ある現象をみるにつけ考えさせられたことがあります。それは、「今年の三年生はおとなしくて覇気がない」とか、「今度の六年生はちょっと頼りない」とかいった子どもたちの姿の解釈についてです。

新卒一年目、担任を持つことになった中学一年生の授業は、自分が思っていたような方向へと進めることができ、子どもたちも大変生き生きと取り組んでくれました。しかし、二回目の一年生に同じ方法を試みようとしましたがうまくいきません。これは、私自身に子どもを見る力がなかったことも事実ですが、私という教師が子どもに合わせて変わっていける力の不足が最大の原因ではないかと思われます。

自分自身が変わるべき方向は、いかなる道であるべきなのか、その手がかりを得るため、大学院の二年目の今年、努力していきたいと思います。

板花利美（保健体育専修）

教育学部を卒業して、教職に就いてから八年間を経た後、好運にも本学大学院の教育学研究科の一期生として、再び学ぶ機会が県教育委員会より与えられた。

一年間の研修を終え感じていることは、学生として本学で学んでいた時に比べ、主体的に内容の濃い学習ができたということである。教員として実際に教育現場で働いてみると、教科指導や生徒指導その他の様々のことで、自分の力不足や勉強不足を感ずることが多かった。また、教員というある偏った方向からものごとを考えすぎているのではないかと感ずることも多かった。そうした状況の中での今回の研修であったので、実践に結び付けたい、多面的な考えを学びたいという気持ちが強く、充実した学習ができたように思う。

これからは、大学院で学び得たものを少しでも実践に生かせるよう努力していきたいと思う。

◇一年次生◇

岸田幸弘（学校教育専修）

九年間の現場での経験の中で、二つのことが私にはよくわからなかった。一つは子どもの思考や学習、それに関わる動機づけなど。もうひとつは授業分析である。大学で学んだことが自分の身に付いていないといつも感じていた。いつかもう一度学びたいと思っていたところ、現職のまま地元の大学院で学べる機会を与えていただき、ありがたく思っている。

研究はまだ始まったばかりで方向も定かではないが、教える側から教わる側へと立場を逆転させてみて、子どもたちがじっと先生の話を聞くことに耐えていることが実感としてわかった。二年目に現場にもどったときの勤務と研究の兼合いが難しそうだが、しっかりと研究したいと思っている。

竹中雅幸（国語教育専修）

忙しい日々の中では、季節の移ろいに「はっ」と驚く余裕はない。また、ゆとりのない日々の中では、その日暮らしで、ロマンを追い求める世界もない。

現場で16年間、生徒とともに生き、その時その瞬間、精一杯教え、共に学んできた。しかし、一人間としては、「放出」だけであって「吸収」「充電」がなく、枯れる一方であった。

今、こうして、大学院に向かう列車の窓から、まわりの風景を眺め、また、読みたい本を読み、初夏のすがすがしさを感じられる幸せを、ありがたいと痛切に思っている。

この二年間を充実させるもしないも、私自身の心意気ひとつである。「学ぼうという姿勢」を忘れず、「いかに生きるかという信念」を忘れず、日々新鮮な気持ちで生活していきたいと思っている。それが、こういう機会を与えてくださった方々への、お礼だと私は思っている。

諏訪順一（数学教育専修）

教師生活十三年が過ぎ、一応学校生活全般については理解してきたとは思ったのですが、もう一度違った観点から数学教育について学習をしてみたいと思いました。今回、その機会を与えられ張り切っているところです。

現場の諸先輩方から、一流のものを見たり聞いたりして、そして現代では世の中の動きがどのようになっているのか最新の情報を身につけてきなさいと励まされてきました。

まだ、入学してわずかしか経っていませんので、諸先輩方や先生方の研究物を拝見させていただいているところです。しかし、文章や語彙の意味など分からないことが多く勉強不足を痛感しております。これからも初心を忘れずに頑張っていきたいと思います。

田畑和秀（理科教育専修）

久しぶりに吸い込む大学の空気は、やはり自学自習そして自由。自分が学部生だった時のことを思い返しながら毎日大学への坂道を上って行く。

理科教育専修の院生として本当に伸び伸びとさせていただいているが、それもやはり「自分から学ぶこと」を理念に据えているからこそと思う。

今の所は発表された多くの文献を整理しながら、自分の中の記憶に残している。

世界の理科教育や様々な理科教育に関する学会の存在を知り、未知の文献や研究に触れるだけでも心躍るものがある。短い期間で不安や焦りもないとは言えないが、とにかく今は、こうして学び考えられることへ感謝をしたい。

大工原敦子（音楽教育専修）

入学してから、一か月が過ぎました。この一か月の間、勉強することに時間を費やしている幸せを感じて来ました。授業は、少人数で受けるため先生との対話、学生同志での対話が出来、新しい視点を学びました。そして、先生方のさらに専門的な講義は、私達の世界を広げて下さると思います。今は、自分のために勉強している毎日ですがいつも頭から離れないのは、この勉強の行きつく先には、子供達がいるということです。学ばせて頂いている恩返しができるようになりたいと願っています。あまり気張らず、しかしたゆまず勉強させて頂きます。

田澤　稔（保健体育専修）

入学宣誓式の時、鈴村先生より、教科教育研究とは、教育実践されたものをどう理論化し、言語化していくかを研究することだとお話があった。

教職九年間を振り返ってみると、自分が理論より実践ありきとやってきただけに、このお話は、現場から離れた私にとって、多くの課題を与えてくれた。例えば、小学校の体力づくりで実践してきた中にも、もっと理論づけされた運動があれば子供に定着した、意味のあったものになったと思う。しかし、現場の目まぐるしい状況では、一つの実践を理論的に分析するような場と時間がなかった。そこで、この大学院の貴重な研究の機会を十分生かして、一つ一つの課題研究に励みたい。

増田秀晃（技術教育専修）

信州大学教育学部の大学院制度実施に伴い、この度、現職教員としての立場から教科教育専攻技術教育専修に入学を致しました。

志願の動機は、教師として教科教育（技術）の専門性をさらに高めたいというのが所期の目的であります。十六年ぶりに学生として再度勉強する機会に恵まれ、本当に感謝いたしております。

入学宣誓式のガイダンスでは、研究科長の鈴村先生から、本科では教育実践教育に重点を置き研究せよとのこと、また、その実践とは子どもが心を動かすような実践でなければならないという点を強く強調されました。そのためにも、ひとつの研究を理論化すること、これが大学院での仕事であると述べられました。

さて、今何を研究しなければならないのか……この命題を常にかかえながら生活しているが、与えられた時間を前向きに精一杯精進し、頑張りたいと思います。

大西孝一（美術教育専修）

今年度から信大の大学院に美術科が開設されるそうだ、という話は風のたよりで耳にしていましたが、まさか自分がその第一回生になるとは夢にも思っておりませんでした。八年ぶりの信大は懐かしく、以前の学生時代を思い起こさせてくれました。現職教員として長期の研修が行なえるというこの恵まれた機会を生かし、今まで現場で考えて来た様々な疑問や課題を少しでも解き明かすことができたらと考えています。

学校では校務の忙しさを口実に研究等を疎かにしがちな日々を過していたので、この限られた、しかしゆとりある時間を大切にしたいです。そして大学院という新たなページに何らかの形で良い意味の足跡を残せるよう自分なりに努力してゆきたいと思っています。

第四回総会報告

信州大学教育学部同窓会第四回総会は、平成三年八月十一日（日）長野市県町犀北館において、六十六名の参加を得て開催された。

倉田稔会長から挨拶があった後、風間　紀、富沢慶吉が議事団に選任された。さらに議事録署名人に、島田孝司、佐野昌夫を選任し、書記に久保信男、野口宗雄を任命して議事に入った。次の五議案が審議された。

第一号議案　平成二年度事業報告書、収入・支出決算書及び財産目録の承認について

関谷俊行幹事長から総会資料に基づき平成二年度事業について、また、横田通会計担当幹事から収入・支出決算書及び財産目録について説明があった。さらに山口勇内監事から会計監査報告があり、全員一致で原案通りこれを承認した。

講演中の中村一雄氏

第二号議案　平成三年度事業計画書（案）及び収入・支出予算書（案）の承認について

幹事長及び会計担当幹事から資料に基づきそれぞれ説明があった後、審議の結果原案が承認された。

第三号議案　会則の改正について

幹事長から会則第六条の一項に「大学院教育学研究科」を追加する一部改正の提案があり、全員一致でこれを承認した。

第四号議案　役員の改選・任期の確認について

① 役員の任期満了に伴い、会則第十条に基づき役員の改選・任期の確認をした。

② 倉田会長から次期会長の提案がなされ、全員一致で原案通り承認した。

③ 新会長新井好仁氏より就任受諾と決意表明があり、続いて次期各役員（副会長、本部理事、地区代表理事）の推薦を受け、これを全会で承認した。次に幹事が委嘱された。

第五号議案　同窓会館建設問題研究委員会の設置について

会長から主旨説明があり、新会長のもとで組織化し発足するよう提案があり、全会で承認した。

議事終了後、鈴村金弥名誉会長と堀内照夫農学部同窓会長から来賓祝辞をいただき閉会した。

総会に引続き、前長野県教育史編集主任中村一雄氏による「信州の教師を語る」ご講演をいただいた。

第三期同窓会役員名簿

（平成三年八月～五年八月）

名誉会長　鈴村金弥

会長　新井好仁

副会長　清水　正　矢嶋直徳　丸山昭子　関谷俊行　清水厚実　風間　紀

監事

本部理事　松橋英幸　深沢よしの　山森綱江　宮沢安夫　栗林茂雄　渋沢頼子　西沢和夫　原　牧夫　山崎義信　滝沢忠男　内藤光雄　飯田忠文　横田　通　杵渕恭宏　久保信男　和田　清　渡辺時夫　中村浩志　別府　桂

地区代表理事

下伊那　塩沢知治　上伊那　湯沢　敏
諏訪　小口　明　木曽　三村喜一郎
北安曇　小林福治　南安曇　下条周信
松本　柳沢　廣　佐久　前島武彦
上小　上原久夫　更埴　下崎文義
上水内　田島　守　上高井　冨沢慶吉
下高井　児玉英親　飯水　丸山　登
塩筑　牛越文雄　長野　関　啓
高校　倉嶋安隆
県外　真島和男　藤井　治

幹事

松林　大　佐野昌男　栗林道子　牧　三代
古川玲子　島田孝司　竹前清吾　北沢　競
野口宗雄　赤羽貞幸

同窓会の組織充実案

副幹事長　佐野昌男

同窓会発足以来の懸案であった組織充実活動が本年度の重点課題として取り上げられることになった。

現状は、昭和六三年以来の卒業生の組織率が、二十数パーセントという低さであり、是非その充実をはかりたい。本会は入会時に一万円の納入で終身会員になれるという会員にとっては、以後会費を納入する煩わしさから解放されるという有難い会である。そして、会員には毎年同窓会報が配布され、総会の折には立派な講師による講演が聞け、会員同志の懇親会ももたれる。ゆくゆくは支部組織も充実し、支部活動も活発化し、同窓の集いも多くもたれることと思われる。

そこで、昨年よりお願いしている地区組織作りを実現させたいと考える。すなわち、各地区に支部長と副支部長を置き、その下に事務局を置くという組織化である。事務局は地区代表理事が兼務し、具体的にはこの事務局がその地区の組織の現状を把握する。その把握のために、例えば長野地区でいうと既存の東部、南部、西部……など七ブロック、松本地区でいうと小学校・中学校の二ブロックというように細分化し、そのブロックにブロック長を置き、ブロック長がそこに属している小中学校の組織状況調査と入会の勧めをそれぞれの学校の責任者に依頼して実態を把握する。責任者にはその学校の教頭先生か教務主任先生にお願いするのがよいであろう。こうして把握した結果はこれと逆方向に流し、本部事務局へ報告する。本部事務局はこの結果を見て、直接会費未納の卒業生に会費納入のお願いと振り込み用紙を送付する。

会員の皆様にも会費未納の信大教育学部卒業生に会費納入のお願いを強く勧めていただきたい。

会費の納入状況とお願い

同窓会会則の一部変更に伴い本会の正会員は、「信州大学教育学部、大学院教育学研究科、並びに前身の長野師範学校、松本女子師範学校、長野青年師範学校

に在籍した者」と定め、第七条では「正会員は終身会費として一万円を納する」としています。このことから本会設立以後の新入生には、入学時に会費の納入を願い、ほぼ九十%前後の納入率となっています。しかし既に卒業された方々との連絡が的確に進まず、学部入学者全体の納入率は二十六%強にとどまり苦慮しています。

会費は現在大別して二つの部門に分けて運用しています。一つは新入生の会費を以ってその年度の会を運営する一般会計であり、他方は卒業生の会費を以って運用する基本財産であります。この基本財産は、将来の本格的な事業の為に積み立てを原則とした資金であります。従って今年度から特に重点化した組織の充実や長期計画の策定及びその実現の為には、是非ともこの基本財産の蓄積を重ねて参らねばなりません。正会員各位の御協力を切に願うところであります。

会費の納入については、本会事務局にお問い合せ下さい。直ちに「払い込み通知票」をお送り致します。なお既に納入下さった方は、二重の納入にならないよう御留意下さい。

事務局　長野市西長野六ノ口
信州大学教育学部　教育実践研究指導センター内電話（〇二六二）三二―八一〇六（代表）

平成三年度退職教官

入来義彦先生（生物学）
昭和三十五年十月　信州大学教育学部
平成四年三月　定年により退職

研究助成海外派遣学生便り

アメリカ

英語科　竹根靖恵

昨年九月にユタ州立大学に留学し、既に半年が過ぎ、私のアメリカでの生活も次第に落ち着いてきたところですが、このアメリカ留学に際しましては、同窓会の方より、ご援助を頂き、大変感謝しております。

ユタ州立大学は、学生数約一万五千の総合大学で、標高約一五〇〇メートル、人口約三万人のユタ州ローガンという、美しく静かなモルモンの里に位置し、この素晴らしい環境の中で、私は勉学に励んでいます。

現在、大学は冬学期を迎え、授業にはようやく慣れてきたものの、外国人として言語の違う異国の地で学ぶことの難しさを日々改めて感じています。寮生活では、アメリカ人のルームメイトとの共同生活を通して、アメリカの文化・習慣・教育について学んだりと、新たな発見の毎日です。この留学という貴重な体験を、今後の飛躍につながるよう、できるだけ多くのことを吸収していきたいと思います。

中国

社会科　清水春樹

私は平成二年度教員養成大学学部学生海外派遣制度により、昨年九月から中国遼寧省大連市にある遼寧師範大学に留学しています。ここ大連市は〝アカシアの街〟と呼ばれるように緑豊かな都市で気候も比較的温和なため生活しやすい所です。こうした恵まれた環境の中で日本人、ロシア人、ドイツ人など約五十名が主に中国語の学習に励んでいます。

私達の大学では午前中四時間中国人の先生方による中国語の授業を受け、午後は太極拳や伝統武術などを教えてもらったりしています。

留学してから既に五ヶ月程たちましたが、毎日毎日の中国語学習のおかげで今では一般の中国人学生達とも簡単な会話ができるようになり、日本と中国の生活、習慣などの違いについて話し合ったりして大変勉強になっています。留学期間もあと半年となりましたが、これからも一層頑張って帰国までに一つでも多くのことを学んできたいと思っています。

第五回通常総会

日時　平成四年八月十一日（日）午前十時～
会場　長野市岡田町「ホテル信濃路」
次第
1　開会
2　会長挨拶
3　議長団選任
4　議事録署名人の選任並びに書記の任命
5　議事
　第一号議案　平成三年度事業報告書、決算書および財産目録の承認について
　第二号議案　平成四年度事業計画書（案）および予算書（案）の承認について
　第三号議案　組織充実計画（案）について
6　名簿刊行事業について報告および表彰
7　来賓祝辞
8　閉会
〈十一時二〇分より記念講演会〉

記念講演（一般公開）

「忘れ得ぬことども」
長野県豊丘村教育委員長　毛涯　章平　氏

〈講演要旨〉
「忘れ得ぬことども」を具体的にいくつか上げて、そこから何を想い、何を教えられたか。それが、自分の支えになって今日まで生きているもの、などについてお話してみたい。

記念講演終了後、ホテル「信濃路」において、懇親会（会費五、〇〇〇円）を開催します。こちらへも多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。